

(2) 奈良県立畝傍高等学校の取組

教頭 佐野勝典

ア 本校の概要

本校は平成26年度から5年間、文部科学省より「スーパーグローバルハイスクール」の指定を受けていた。またその後継事業として、令和元年度より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業校〔グローバル型〕」の指定を受け、全生徒対象の「課題研究」を核とした探究的で深い学びの実現に向け研究実践を重ねている。

イ WWL事業連携校としての取組 ～成果及び課題～

(1) 「課題研究」における教員の指導体制及びルーブリック敷設による評価体制

第2学年全員を対象とした「課題研究」実践については2年目を迎え、1年目に残った課題をふまえて作成した計画に則り、大きな齟齬なく動いている。ルーブリックを敷設したことにより、教員は、「課題研究」の目標や期待される生徒の姿が具体的に変わったので、教員は「伴走者」として生徒の支援をしやすくなった。教員の体制づくりについては、教科等横断的な学習の実現を目指し、その強化に努めている。約30名の授業担当者を対象に、定期的に担当者会議を開催し、短時間・複数回で研修を実施している（右の図は講座イメージ図：第2回運営指導委員会資料より）。会議では共通のワークシート及び指導案、その時期に応じた「目標、目的」を確認するようにしている。またワークシートを改訂したことにより、生徒の動機が具体性を増すなど、生徒自身が選んだ課題を「自分事」としてより捉える一助になったと思われる。今後、求められるのは「伴走者」でありつつも、担当する生徒に「何を学ばせるか」を教員自身も考えることにある。例えば、生徒が該当分野の専門家へアプローチできるような「知識の媒介者・中継役」のような役割を果たすこともその一つと言える。「持続可能な」体制づくりを継続しながらも、教員の役割について校内で整理をし、共有をしたい。



(2) 地域との協働について

地域との連携については、昨年度より、注力しているところである。「課題研究」の内容に対するご助言に加えて、出前授業や講演会の講師としてもご助力頂いた。例えば、NPO法人やベンチャー企業の代表の方などを招聘し、放課後の時間帯に特別講座（学校設定科目「課題研究α」公開講座）などを実施している。生徒たちにとっては、多くの「気づき」を得る機会になっており、考え方やものの見方に至るまで、良い刺激を受けているようである。また地域協働学習実施支援員による各機関とのこまめ



な連絡調整及び海外交流アドバイザーによる大使館等への働きかけもあり、新しいネットワークが構築できた。具体的に依頼内容を伝えることにより、共通認識が図られたものとする。今後も「探究サポーター（仮称）」のような形で、本校の探究の取組を支援頂けるような体制の構築に向けて動き出している。またこのような講演会等に関わる発信の方法については、本校 HP への掲載などを通して、生徒への呼びかけをすると同時に、育友会にも協力を願い、保護者の探究学習に対する理解が深まることで、生徒たちを取り巻く学びの環境も、さらに充実したものになっていくものと期待する。

(3) 研究成果の普及

昨年度より、本校には「総合的な探究の時間」事務局が設置されており、また研究指定校として成果の普及を期待されているところである。今年度は「総合的な探究の時間」学習指導研究会（令和3年11月15日開催）において、本校の探究の取組を発表したところ、活発な研究協議をしていただいた。また、ワークシートの共有を依頼されるなど、他校の先生方との交流も深まった。今後はワークシート等について、他校でも活用できるよう、データを本校ホームページに掲載するなど、発信にも努めていきたい。

(4) 外部コンテスト等への参加

外部コンテスト等への参加については、コロナ禍における様々な制限がある中で、生徒たちは、可能な限り挑戦できたのではないかと考える。例えば、全国グローバル型探究オンライン発表会へは昨年度に引き続き2度目の挑戦をした。地域課題に迫る際に、地域の方のお話の中から課題を発見し、自分た



ちの考えを整理し、具体化させていく過程において、生徒たちは「自分事」としてその課題に向きあうことができた。また「総合的な探究の時間」学習発表会及びWWL 課題研究発表会（奈良県立国際高校が拠点校）にも参加の機会を得た。「探究」の取組を校外の生徒や教員と、共有・確認できたことで探究活動の意義をより深く理解した様子であった。